

## 第 31 回国際軍事史学会大会参加報告

立 川 京 一

### 1 大会の概要

2005（平成 17）年度の第 31 回国際軍事史学会大会は、8 月 21 日（日）から 26 日（金）までの間、スペインの首都マドリッドで、Centro Superior de Estudios de la Defensa Nacional (CESEDEN)（国防高等研究所）を会場に開催された。今次大会の企画・運営はスペイン軍事史評議会が担当し、参加者は 37 カ国、約 200 名であった。日本からは、立川のほか、林吉永防衛研究所戦史部長、源田孝航空自衛隊幹部学校主任教官（現、戦史教官室長）、秋谷昌平元防衛研究所図書館長、高橋久志上智大学教授・軍事史学会会長、堅田義明名古屋商科大学教授が参加した。このうち、堅田教授と立川が研究発表を行った。今次大会の共通テーマは「トラファルガー海戦時代の陸海軍力」であった。本年がトラファルガー海戦から 200 年目にあたることから設定されたテーマである。大会の日程は次のとおりであった。

8 月 21 日（日）

受付

各種委員会

8 月 22 日（月）

開会行事

セッション

空軍博物館見学

8 月 23 日（火）

セッション

マドリッド市長主催レセプション

8 月 24 日（水）

エクスカーション（セゴヴィア）

8 月 25 日（木）

セッション

海軍博物館見学

8月26日(金)

セッション

総会・閉会行事

フェアウェル・ディナー

## 2 研究報告

スペイン軍事史評議会副会長のユーゴ・オドネル公爵が「ネルソン提督とトラファルガー海戦」と題する基調講演を行ったのをはじめとして、各国の38組の研究者により、トラファルガー海戦や、ナポレオン戦争に関わる様々な軍事的事象、あるいは同時代の各国の軍事力に関する広範な研究発表が共通テーマにそって行われた。こうしたテーマでこれだけ多数の研究発表を集中的に拝聴し、効率良く勉強できる機会はそれほど多くはないと考えられる。そのような意味で、本大会への参加は非常に貴重な経験となった。研究発表の中で、特に興味をひかれたテーマを列挙するならば、ナポレオン戦争における女性の軍隊(陸軍)における役割、ナポレオン戦争時のスペイン諸地方の陸海軍将校、フランス陸軍のアンリ・フィリップ・ペタン元帥が大佐時代に陸軍大学校で行ったナポレオン戦争についての講義内容、分割によって国を失ったポーランド人が外国においてポーランド人部隊を編成したこと、スペインでゲリラ戦を経験したオランダ人将兵に関する発表、イギリスの海洋支配再検討などである。また、豊臣秀吉の朝鮮出兵時の海戦とトラファルガー海戦の比較、地図で見るジブラルタルの発展の様子といった軍事史研究の手法として参考になるようなユニークな発表もあった。

一方、共通テーマとは別に、今回で4回目となるラウンド・テーブルが「冷戦」をテーマに設けられ、堅田教授をはじめ4名がそれぞれの国に関する最近の冷戦研究動向と史料公開の状況などについて報告した。ラウンド・テーブルは各報告の水準が高かったこともあり、好評を博した。

なお、プログラムでは計画されていなかったが、総会・閉会行事前に中国からの参加者による発表があった。内容は、アヘン戦争以降の中国における軍近代化の歴史の概説であった。そこでは軍の近代化が軍民一体による努力であったことが強調され、現在は沿岸警備に力を入れている旨の説明があった。

## 3 立川の研究発表について

立川の研究発表「19世紀初頭の日本の軍事力」は、23日午後のセッションで実施した

(発表の内容に関しては、本誌掲載の拙稿を参照されたい)。今回の発表はフランス語で行ったが、国際軍事史学会大会で日本人参加者が英語以外の言語で発表したのははじめてであった。軍事史の分野では、依然として有力なフランス語を母国語とする参加者や、フランス語を外国語として勉強した経験を有する参加者には好感を持っていただいたものと確信する。発表後、参加者からフランス語で話し掛けられることが多くなったのも、その証左であろう。なお、本報告を実施するにあたって、フランス軍事史評議会会長でパリ高等学術研究学院教授のエルヴェ・クートー＝ベガリ氏が立川の草稿を事前に読み、コメントしてくださった。記して謝意を表したい。

#### 4 エクスカーション

大会の中日にあたる 24 日は、エクスカーションにあてられた。今回は、マドリッドの北西方約 100 キロに位置するカスティリア地方のセゴヴィアを訪問し、同地に残る城砦「アルカサル」を見学した。セゴヴィアは、それ自体が大岩上に発展した要塞都市であるが、「アルカサル」はその一端にある断崖に建設された防衛上極めて重要な施設であった。また、カスティリア地方の歴史を振り返っても、この城砦が同地方に安定をもたらすための中心舞台となっていたことがわかる。それは、同城砦の城主であるカスティリア王が、隣接する国や地方と婚姻を通じた縁戚関係を確立して、安全保障に努めたという経緯があるからである。

#### 5 軍事博物館見学

22 日に空軍博物館、25 日に海軍博物館の見学が実施された。

空軍博物館はマドリッド郊外に位置し、敷地面積は 1 ヘクタールである。5 つの格納庫の内外に置かれた航空機は 100 機以上、模型を合わせて展示物は 1000 を越える。第二次世界大戦期に活躍した航空機（ナチス・ドイツ製を含む）から、冷戦期に運用されていたものまでが保存・展示されているが、特徴は米ソ両国がそれぞれ製造した航空機が隣り合わせに展示されていることである。スペインの微妙な対外関係が象徴されており、興味深い。

海軍博物館はマドリッド市街地の中にある。さすがに大航海時代の一翼を担った国であるだけに、展示に力が入っていることが伝わってくる。確かに、空軍博物館とは異なって、実際の船を展示するということが不可能で、多くは模型であるが、実物も例えばマストなど船体の一部、大砲、砲弾、錨、各種の道具類、地図、戦争画、海軍の発展に貢献した人

物の肖像画・胸像などを展示し、海洋におけるスペインの活躍の歴史、そして、今日も引き続き世界の安全保障に貢献している姿を示している。新大陸に到達したクリストファー・コロンブスの肖像画が2枚展示されていた。しかし、その絵はコロンブスの死後、時代を経て描かれたもので、本当にコロンブスを描いたものかどうか議論が分かれている。

空軍博物館、海軍博物館ともに専属の館員による説明つきで見学でき、深い理解を得ることができた。また、大会運営側の配慮により、一般の見学者とは時間を違えて、会議参加者だけでゆっくり見学させていただいた。

## 6 総会

今次総会では5年に一度の国際軍事史評議会役員の変更が行われた。会長のリュック・デ・ヴォス氏（ベルギー）と事務局長のピート・ケンプハウス氏（オランダ）は再任され、会計にはフリッツ・ストクリ氏（スイス）が新たに選出された。また、理事として9人が選出され、日本から立候補した高橋上智大学教授・軍事史学会会長が当選した。日本人が国際軍事史評議会の理事選挙に立候補したのも、選出されたのもはじめてであるが、何よりも日本への期待の大きさの表れであると理解できよう。同時に、このことは林戦史部長が着任以来7年続けて会議に参加し、戦史部員に会議への参加と研究発表を促して、日本の存在をアピールし続けた結果でもあると考えられよう。

また、今次総会で、数年間の年会費未納により、ロシアとオーストラリアが除名された。そして、新たに、アラブ首長国連邦、カメルーン、キプロス、セネガル、ヨルダンの加盟が認められた。

## 7 次回以降の予定

次回2006年度の国際軍事史学会大会は8月20日から26日にかけて、ドイツのポツダムで開催される。共通テーマは「国民国家、ナショナリズム、そして軍」である。ドイツ人らしく、すでに大会の日程、会場、宿泊施設はもとより、細かな時程も決定されている。また、2007年度は8月第1週目に南アフリカでの開催が決定されており、共通テーマも「地域主義／地域組織と軍事力」に決定している。

## 8 所見

国際軍事史学会大会参加者のうち、国際軍事史学会会長でベルギー王国陸軍士官学校教

授のリュック・デ・ヴォス氏、同事務局長でオランダ陸軍軍事史研究所所長のピート・ケンプハウス氏、ドイツ軍事史研究所所長のヨルグ・ドップラー氏、ギリシア海軍大学教授のイオニラス・ルーカス氏、イリノイ大学教授のジョン・リン氏、元オハイオ州立大学教授のアラン・ミレット氏、同大学教授のジョン・ギルマーティン氏、テルアヴィブ大学教授のマティティアフ・メイツェル氏らはここ数年の間に防衛研究所が客員所員として招聘して研究会を実施した研究者でもある。一般に、客員所員として招聘した研究者とは一回で終わってしまうケースが少なくないが、国際軍事史学会大会の場で、ほぼ毎年、こうして顔を合わせることによって関係が継続し、一段と深まり、発展していく。また、毎年、防衛研究所が主催している戦争史研究国際フォーラムを企画・運営するにあたって、軍事史国際会議で知遇を得た研究者に協力を期待できることは大きなメリットになっている。実際、本年度の戦争史研究国際フォーラムには先述のメイツェル氏が発表者の一人として参加した。

このように国際軍事史学会大会は、防衛研究所が軍事史の分野での国際交流をいっそう活発化させる上で重要な機会となっている。また、防衛研究所戦史部員が同会議に参加するのみならず、研究発表を行うことが恒常化しているのはたいへん好ましい傾向であると言えよう。防衛研究所戦史部の質的向上と、諸外国における評価につながるこうした活動は、今後も継続するよう、さらに努力していくことが肝要である。

**(防衛研究所戦史部主任研究官)**